
バカとおサルと召喚獣

司馬遼太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとおサルと召喚獣

【Nコード】

N9675L

【作者名】

司馬遼太

【あらすじ】

文月学園で「試験召喚システム」を利用した動乱が今、幕を開ける！

吉井明久・坂本雄二…その他本編登場人物が大暴れ！

バカとテストと召喚獣の二次創作です
主にオリ主です

第一問（前書き）

どうも始めまして。

司馬遼太という者です。

いつつもラノベ等を読んてるダメ学生です。

この作品は司馬遼太の処女作ですので、生暖かい目で見守って下さいm(_____)m

第一問

バカテスト

問 「調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい」

姫路瑞希の答え

「問題点：マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。」

合金の例：ジュラルミン」

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っかけ問題なのですが、姫路さんは引っかけありませんでしたね。

4

土屋康太の答え

「問題点：ガス代を払っていなかったこと」

猿飛申助の答え

「問題点：材料の賞味期限がきれていた」

教師のコメント

そこは問題じゃありません

吉井明久の答え

「合金の例：未来合金（　すごく強い）」

教師のコメント

すごく強いと言われても

桜舞う4月

その桜が舞い散る道を走る少年…

今、物語が始まる

走っていた少年は玄関の前に立っている浅黒い肌をした短髪のいかにもスポーツマン然とした男に気づき挨拶をする

「あ、おはようございます。猿じー鉄人先生。」

「猿飛、今、猿人って言わなかったか？あと、それからさも当然のように鉄人と呼ぶな！」

「わかってますって」

「ほう、なら俺の名前を言ってみろ」

「…えっと、鉄村先生？」

「お前は、去年の担任の名前を忘れるのか！？」

「すみません」

「まったく、坂本や吉井ですら覚えている事を忘れるとは…俺の名前は西村だ。よく覚えておけ」

「わかりました」

この西村と名乗った男は、生活指導の鬼で知られる西村教諭。トライアスロンが趣味で、その鍛え上げられた肉体から、通称『鉄人』と呼ばれる

そしてこの西村教諭と話しているとある服装をした少年の名前を『猿飛申助』と言う。

「それと猿飛、他に何か言う事はないか？」

「えっと…今日も肌が黒くて暑苦しいですね」

「お前には俺に対する罵倒と肌の色の方が重要なのか？普通はまず挨拶だろう」

「あ、そっちか。すみません。気づきませんでした」

「まったく、あと猿飛、今更だが…何故お前は寝間着で登校してくるんだ！」

「寝坊しかけて危なく遅刻しそうになったので」

「危ないのはお前の頭だ！」

「失礼な、大丈夫ですって、制服一式カバンに入れて持ってきてますから」

「…もついい、ほれ受け取れ」

箱から封筒が出され渡された。

「あ、ありがとうございます」

頭を下げて礼を言った申助は受け取った封筒を開け始める。

「それにしても、どうしてこんな面倒なやり方でクラス編成を発表するんですか？掲示板とかで大きく張り出してしまえばいいのに」

申助は封筒を開けながら聞く。

「普通はそうするんだけどな。まあ、ウチの学校は世界的にも注目されている最先端システムを導入した試験校だからな。この変わったやり方もその一環ってワケだ」

「へえ、そういうもんなんですかねえ」相槌を打ちながら封筒を開

けていく。

「猿飛、今だから言うがな」

「なんですか？」

「俺はお前を去年一年見て『もしかすると、猿飛は本格的なバカなんじゃないか？』なんて疑いを抱いていたんだ」

「そいつは、大きな間違いですよ。そんな誤解をしているようじゃ、更に、『でくの坊』とか『脳味噌筋肉』なんて渾名をつけられますよ？」

そして封筒の封が切られた

「ああ、振り分け試験の結果を見て、先生は自分の間違いに気が付いたよ」

「それはよかったですね」

相槌を打ちながら封筒の中の紙を出す。

「喜べ猿飛。お前への疑いはなくなった」

そこには、

『猿飛申助…Fクラス』

「お前はバカだ」

こうして猿飛申助の最低クラス生活が幕が開けた。

第一問（後書き）

初めて、この「小説家になろう」で小説を書きましたが、かなり疲れしました。

なにせ、初めてで慣れていないので書くのに時間が信じられないほどかかり、間違いだらけで修正に時間がまた信じられないくらいかかる…という具合です

正直甘かった

ここまで疲れるとは…

1日一回更新している先生の凄さを感じました。

先ずは、一週間に一回更新を目指します！

生暖かい目で見守って下さい。

意見、感想等ありましたらよろしく願います。

第二問（前書き）

意見、感想等ありましたらよろしく願います

第二問

第二問

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい

- 『(1) 得意なことでも失敗してしまうこと』
- 『(2) 悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え』

姫路瑞希の答え

- 『(1) 孔法も筆の誤り』
- 『(2) 泣きつ面に蜂』

猿飛申助の答え

- 『(1) 孔法も筆の誤り』
- 『(2) 泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる、(2)なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますかね。

土屋康太の答え

- 『(1) 孔法の川流れ』

教師のコメント

シユールな光景ですね。

吉井明久の答え

- 『(1) 猿飛申助も木から落ちる』
- 『(2) 泣きつ面蹴ったり』

教師のコメント
君は鬼ですか。

「ちくしょう、鉄人め。バカってはつきり言わなくてもいいじゃないか」

トイレで寝間着から制服に着替えた申助は、鉄人に対する愚痴を言いながら教室に向かって歩いていく。

「それにしても、さっき見たAクラスの教室は凄かったなあ。設備が、ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシート等ってまるで高級ホテルみたいだったよなあ。いいよなあ」

Aクラスに対する羨みの言葉を言いながら申助はFクラスに急いだ。

「なんだ、この扱いの差は」

Fクラスの前で申助は少し躊躇していた。なぜなら、彼が今立っているドアの前の時点でAクラスとの差が出ているからだった。

「ええい、ままよ」

申助はドアを開けた

「ちわーす」

「おう、申助か」

ドアを開けた先には、教壇があり、その教壇にガラの悪そうな野性味のある少年が立っていた。

「雄二、お前もFクラスか」

「そうだ、ついでにこのクラスの代表だ」

「くそう、こんなバカゴリラに負けるなんて…」

「何か言ったか？バカザル」

「誰がバカザルだ！」

「お前だ」

「ムキー！」

この申助をサルと罵倒した少年の名前は『坂本雄二』
申助の悪友で中学の頃は異名を付けられるほど強かった。

「そういや、もしかして俺が一番遅かった？でも、ここに一番ふさわしい顔がないけど？」

教室を見回してある顔を探す申助

「うん？ああ、明久ならまだ来ていない。遅刻だ」

「ほっ、よかった。明久に学力で負けたなんて事になったら生きて生けそうにないしな」

「同感だ」

「ああ、そうだ。席は？」

「そこらにでも座れ」

「…改めてここが最低クラスって事を思い知らされた」

申助は言いながら席につく。
すると、勢いよくドアが開いた。

「すみません、ちょっと遅れちゃいましたっ」

「早く座れ、このウジ虫（ゴミ虫）野郎」

ドアを開けて入ってきた人物に罵声が飛ぶ

「来てすぐにそれってひどくない？雄二に申助」

「聞こえないのか？ああ？」

「黙れ明久、もう一度言わせる気か？」

この明久と呼ばれた少年は『吉井明久』、申助の悪友その2で学力的に学年最低ランクのバカさと、行動力により雄二、申助と共に鉄人に目をつけられている。同時にとある（・・・）称号持ち。

この『吉井明久』、『坂本雄二』、『猿飛申助』の3人が学年で「3バカトリオ」または、「問題児トリオ」として名を馳せており、鉄人に目を付けられている。

「あう…だけど、申助は席についているからともかく、何で雄二が教壇に？」明久が不思議そうに聞く

「先生が遅れているらしいから、代わりに教壇に上がってみた」

「え？それじゃあー」

「諦める明久、残念な事にゴリラがこのクラスの最高成績者だ」

「黙れ、そのゴリラに成績で負けたサル」

「誰がサルだ！」

「成績で負けた事は認めるんだな…」

「えっと、それじゃ、雄二がこのクラスの代表なの？」

「ああ、そうだ」

雄二はニヤリと笑った

「認めたくはないがな」

申助は嫌そうに溜め息混じりに言う

「これでこのクラスの全員が俺の兵隊だな」

ふんぞり返って床に座っているクラスメイト達を見下ろす雄二。
クラスメイトは皆椅子がないため床に座っている。
その光景を見た明久が呟く。

「それにしても……流石はFクラスだね」

「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

不意に背後から覇気ののない声が聞こえてきた。
申助達が振り向くと、そこには、いかにも冴えないオジサンがいた。

「それと席についてもらえますか？HRを始めますので」

「はい、わかりました」

「うーっす」

「はい」

こうして文月学園2年Fクラスの初日が幕を開けた。

第二問（後書き）

疲れた

いやーBクラス戦が遠い！

余りにも量が膨大だったので教室編と自己紹介編にわけました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9675/>

バカとおサルと召喚獣

2010年10月10日20時45分発行